第4章
チームワーク

キャプテン谷口にとって最後の地区大会、初戦はからくも2対1で勝利した。しかし二回戦の組み合わせがいつもきまって決勝に進出している金成中に決まってしまった。

4・1　野球部の練習中

丸井「キャ、キャプテンちょっと…。」
谷口「なんだ？」
丸井「それがたいへんなことになっちゃいましたよ。あ、あのおどろかないでください。第二戦のあいてなんスが……」
谷口「じょ…、じょうだんじゃない……」
松下「どうかしたのか丸井？」
丸井「第二戦に金成中とあたるんスよ。」
松下「えっ、ほんとかそれ！」
小山「二戦までとは……、ついてないなおれたち。」
谷口「……」
松下「丸井、ざんねんだったな、せっかくグローブを買ったっていうのに。」
谷口「丸井、一年生をあつめてくれ。」
丸井「は…はいっ。」

谷口「レギュラーになりたい者はまえにでろ！　テストをする。」
一年生A「お、おいレギュラーだってさ。」
一年生B「う、うん。」
イガラシ「そうこなくっちゃ！」
一年生A「お、おれもでようかな、どうせダメだけど。」
一年生C「お、おれも。」
一年生D「じゃぼくもついでにでちゃおうかなーっと。」

二、三年生の部員はそのようすをにらむようにじっと見つめていた。

一年生C「や、やっぱりやめとこ。」
一年生A「ぼくも……」
一年生D「エヘヘ、アハ……」
イガラシ「やれやれ、どいつもこいつもビクビクしやがって！」
谷口「イガラシだけか……、ま、いいだろう。まずバッティングからだ。松下投げてくれ。さあみんなも守備について。」
松下「なんだ、なんだ、おまえたち、おれが打たれるとおもってんのかよ！」
島田「それもそうだな。」
遠藤「わりい、わりい。」

谷口「よし、はじめっ！」
松下「ふふ…一年生ごときにおれのタマが打てるとおもってんのか。」

ピッチャーの松下は自信をもってイガラシにむかってボールを投げはじめるのだが……。カーン。

松下「あ…」
一年生B「すっごいセンターオーバーだ！」
一年生C「それもライナーでフェンスにぶつけちゃって。」

カーン、カーン、カーン。イガラシは松下の投げるボールをことごとくバットのしんにあてうちかえした。

松下「はあ、ふう、はあ、ふう…」
イガラシ「もう、いいんじゃないですか…」
谷口「よ、よしつぎは守備だ。得意なポジションはどこなんだ。」
イガラシ「得意っていわれても、よわったな……」
谷口「な、ないのか。」
イガラシ「いえ、ひととおり全部やってきたもんで。」
一年生A「ぜんぶだってさ、すっごい！」
イガラシ「ま、しいていえば内野かなあ。」
谷口「よし、じゃあやってみろ。」

谷口がノックしての守備練習がはじまった。イガラシはここでもすばらしい守備をみせた。

谷口「ようし、そこまでだ！」
イガラシ「どうです、レギュラーになれますかね？」
谷口「もちろんだとも。」
イガラシ「でもいいんですか…」

イガラシがゆびさした方には二、三年生のレギュラーがにらみつけるようにして見つめている姿があった。

谷口「そんなこといってられる場合じゃない。」
イガラシ「へーッ。」

4・2　谷口の家で

谷口はイガラシをレギュラーにするために、だれをレギュラーからはずそうか一人なやんでいる。

父「タカ、なん時だとおもってんだ、いいかげんにねねえか。」
谷口「う、うん。」
父「しんこくな顔しやがって、いってえなにをやってんだ。」
谷口「ひとりうまいのがいて、第二戦につかいたいんだけど……だれをおろすかまよっているんだ。」
父「みんなにたりよったりなのか？」
谷口「実力からいえばはっきりしているんだけど……」
父「じゃ、なにも考えることはねえだろう。」
谷口「でも……レギュラーからはずされる本人の気持ちになると…」
父「なにいってんだ、なにしろ試合にかたなけりゃならないんだろう。」
谷口「そりゃ……」
父「人の上にたちゃそういうこともあるさ、そこがキャプテンのつらいところよ。」
谷口「……」

4・3　次の日の練習

グランドに部員全員をあつめてメンバーの変更がつげられようとしている。昨晩おそくまで考えたためか谷口の目が赤い。丸井はそのことに気がついていた。

谷口「第二戦にそなえてオーダーを一部変更する。」
部員「……」
谷口「丸井のかわりにセカンドをイガラシに守ってもらう！」

丸井「え…」
部員「……」
丸井「いいんだ、どうせぼくがいちばんへたっぴいなんだから……。どうせこうなるとおもっていたんだ。」
谷口「さあ、みんな守備につけ！」
イガラシ「オーライ、セカンドはまかしといてください。」

ナインはベンチにさがった丸井のことが気になって練習に集中できない。
谷口がノック役で守備練習がはじまった。
イガラシだけが大きなこえをだして元気にプレーしている。

谷口「いくぞ！　ショート！」
高木「オ、オウ…」

ショート高木とセカンドイガラシとのダブルプレイ練習がはじまったが高木のイガラシに対する送球がややそれたタマになってしまう。

谷口「ショート！　送球がわるいぞ！　もういっちょ！」
高木「オ、オウ…」

今度も高木のイガラシに対する送球はややそれてしまった。

イガラシ「ちょっとう、このへんに投げてもらえませんかね。ファーストへの送球がワンテンポおくれますからね。」
高木「う…」

イガラシは胸をおさえながら高木に向かっていった。

谷口「もういっちょ！」

ショート高木はゴロをはじいてしまう。セカンドイガラシがそのはじかれたタマをバックアップしてセカンドに送球しようとするがセカンドにはだれもいない…

イガラシ「どうしたのセカンドにはいってよ！　ぼくがカバーしたときはショートがはいってくんなくちゃ。」
イガラシ「まったく野球をしってんのかね！」
高木「く…こ、このーっ！」

セカンドに戻ろうとしながらイガラシはひとりごとのようにつぶやいたことばにショート高木はイガラシをうしろからおしたおしてなぐりはじめた。

谷口「な、なにをするんだ。」
遠藤「あーあー…」
谷口「練習中に暴力をふるうとはなにごとだ！」
高木「だ、だってこいつ一年生のくせにナマイキなことばかりいって…」
谷口「プレイ中には先輩も後輩もない！」
高木「くっ…」
谷口「第二戦も近いというのにダメじゃないか！」
高木「はーい。」
谷口「さあみんなも練習だ、練習だ！」

もめごとがあったがナインは練習を開始した。そんな練習風景を見ることなくベンチにはうなだれてすわっている丸井の姿があった。

4・4　練習後部室前の手洗い場で

小山「はーっさっぱりした。」
島田「くたびれたなあ。」
松下「それより腹がへって死にそうだよ。」
加藤「丸井、なにつったってんだよ、はやくあらえよ。」
丸井「い、いいんだ、ぼくなんかあとで…」

そういって丸井は一人さきに部室の中にはいってしまった。

松下「かわいそうに、すっかり気をおとしちゃってよ……」
島田「まったくなあ……」
加藤「しかしキャプテンもちょっとつめたかないか。そりゃ金成中が強いってんでイガラシをレギュラーにいれたのはわかるよ、でもよ丸井はどうなるんだ。セカンドを守るためにこの半年間、一生懸命練習に練習をかさねてきたっていうのによ。」
島田「そういや、グローブまで新調したっけな……」
加藤「いくら勝ちたいからって、おれはキャプテンのやりかたには反対だな。」
小山「そうだな……」
松下「おれも気にいらないね。」
加藤「みんなでキャプテンに抗議しようじゃないか。」
島田「うむ…賛成だ。」
松下「よし、いこういこう。」

そのとき部室のドアがあいた。

松下「丸井……」
丸井「みんなキャプテンのことをなんだとおもってんだ、かんたんに抗議だなんてきめちゃっているけど、キャプテンだってよくよく考えて決定したことなんだぞ。」
島田「そりゃそうだろうとおもうけど……、いいのかおまえ。」

丸井「いいわけないだろ、そりゃおれだってレギュラーでいたいし試合にだってでたいよ、しかしキャプテンになってくれとたのんだのはおれたちみんなじゃないか、そのキャプテンを信じられないのかよ。」
部員「……」

そのときグランドからイガラシがやってきて部室の中にはいろうとしていた。

イガラシ「丸井さんて、いい人なんだね。」
丸井「う、うるせえ！　てめえなんてだいっきらいだ！　あっちにいけ！」

イガラシは部室のドアをバタンととじた。
キャプテンの谷口は部室の陰で部員のようすを見まもっていた。谷口はばらばらになりかけたナインの心をひきとめた丸井に感謝するとともに、レギュラーからはずされた丸井のためにも第二戦の勝利をちかうのであった。